

疎開の思い出 (東京都中野区啓名国民学校)

秋元 登志子

私たちは戦火をのがれ現在のいわき市湯本町に疎開しておりました。

昭和二十年五月、会津に移り本郷・高田・尾岐・新鶴の四市町村へ学年別に分散し滞在する運びとなり、中野区啓明国民学校六年女子約二十名は新鶴村根岸の花紋屋にお世話になることと決まりました。その一人としてご縁を頂いた私でございます。他に沖中田の中田屋に六年生男子、

根岸の鶴屋に五年男子がお世話になっておりました。

八月十五日の終戦の後も十一月に帰京するまでの六ヶ月間、花紋屋の御主人山内操様を中心にご家族の皆様からご家族同様のお心配りを頂き、日々を過ごさせて頂いておりました。滞在中の記憶を極めて断片的・順不同に述べさせて頂きますと、中田観音へのお参り、その裏手の学校へ通学したこと、校歌「東に高く磐梯の…、鶴沼川の水清く…」と、声高らかに歌ったことなつかしい思い出が脳裏をかすめます。「お呼ばれ」と称して二、三名ずつが各家に招かれ、温かな歓待を受け、おもてなしに預かったこと何回かございました。私は当時の斎藤勇様宅、鶴屋さん左手奥の五十嵐様宅へ伺わせて頂いておりました。

根岸駅手前の小川へ風呂の水を汲みに行き、リヤカーに桶を積み戻つて来ますと、水がこぼれ桶の半分位になってしまいました。その川で泳いだこと、澄んだ水の清らかさ、あの川は今どの様になっているのでしょうか。ぶどう畑で落ちたぶどうを拾い食いをした六年生男子の何人かおったことを思い出し、なつかしいことばかりです。六十年前の六ヶ月余りの期間貴重な体験を通し、同時に村の方々の温情に接し得ましたこ

とは、残る傷害の折にふれ、心の糧として大切に心に留めて置きたいと強く思っております。

帰京致しまして、十年目（昭和三十年）に一度村をお訪ねし、小学校に歓待して頂いた記憶がございます。これを機会に是非再度訪問させて頂けたらと願う次第でございます。

御地の益々のご繁栄と教育委員会ご一同様のご多幸を心より念じ上げます。

水野 宏子

青い空に磐梯山、広がる田んぼ、よく遊んだ小川、戦時中とは思えないのどかな時が流れているそんな新鶴村、なつかしきで一杯です。学校の校舎おぼろげながら写真を見せて頂き思い出しております。およばれのクルミ餅アンコ餅の美味しかった事忘れられません。中田観音の境内でのラジオ体操の涼しかった事、蛍を蚊帳に放して楽しんだ事、お風呂の水汲みをした小川で遊んでいてあまりにも遅いので先生が見に来られた事など、のんびりとよく遊んだものです。

終戦の日子供には何の事か分からず、でも牛田先生のいつにない厳しい様子でのお話の中でこれから先の事が心配になりました。終戦の日からは軍歌ではなく朝の歌「朝はふたたびここにあり」と、歌った事が忘れられません。戦時中の物不足の折、花紋屋の皆様そして新鶴村の方々に大変お世話になりました事厚く御礼申し上げます。色々なパンフレットをお送りいただき新鶴村も現代的になったと驚いております。

あれから六十年も過ぎたのです。新鶴村がなくなるのはとても寂しいですが、町村合併されて増々のご発展を心からお祈り致しております。心より厚く御礼申し上げます。皆様にも呉々もよろしくお伝え下さいま